

New Zealand



Whitianga EVA

Thames High School

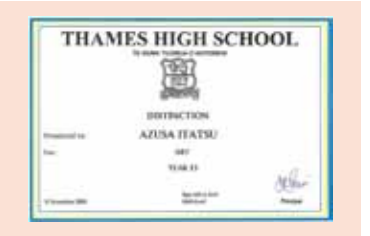


☆韓国人留学生 ☆板津 ママ ☆板津 梓 ☆板津 遥

高校3年間のニュージーランド留学を終えて… 板津 梓

-

あっという間に過ぎた3年間だった。NZに着いて1週間くらいの頃だった。ホストが出掛けたまま夜になっても帰宅しないということがあった。「こんなことがあるのだろうか?」という不安より驚きだった。早々、日本の自宅へメールで知らせた。母はすぐにミッチーへ連絡するとミッチーから「EVAの校長先生の旦那さんが行くから心配しないで」とメールをくれた。電話のベルが鳴るけど、旦那さんはくるけど…英語がわからない。しかし、「こんなこともあるんだ」と自分自身は意外に冷静だった。ただ、遠い日本からのミッチーや家族からのメールは心強かった。(結局、車の故障で次の日に帰ってきた)



その後も、ホストファミリーとの関係は難しいと思った。言葉だけでなく文化の違いなど頭では理解できてもやはり、難しいものだと感じた。私は理解というより相手が譲ってくれたら自分も譲る、相手が我慢してくれたら自分も我慢することを学び自分から慣れていった。高校2年の後半からミッチーの提案もあり年配で小さいお子さんのいないホストに入った。私を干渉せず見守ってくれるホストが心地よく結局、卒業するまでお世話になり今でもその家族とはメールで連絡をとりあっている。

3年間の留学、一番の目的だった英語を学び現地の高校卒業を果たすだけでなく、日本のいいところがたくさん見えてきた。そして、何よりミッチーや家族の支援と留学という選択肢を作ってくれたことに感謝している。大学生になった今、この4年間で留学中知り合った友達の国を今度は自分の力で尋ねてみようと思っている。

留学先のEVAにもチームズ高校にも色々な国の留学生がいた。自分のスピーキングが相手に通じ英語でコミュニケーションをとりたくい

Whitiangaから帰ってきて… 板津 遥

-

Whitiangaから帰ってきて、早いもので1カ月が経とうしている。なにも変わっていない地元の道を歩いて「いやー、桜新町も道が狭くなったな」と感じたが、ただ単に私がNew Zealandの広すぎる道に慣れてしまっただけだった。

さて何て書いたらいいんだろう。私が今回New Zelandに留学したときに考えたことやそれに至る過程を約1000文字にまとめることって、really difficultだもん。だっていろんなことがありすぎたから。でもとりあえずやってみるね。

ちょこっただけやった就職活動に違和感を覚えたのは、大学での就活セミナーに出た時だった。私って、銀行や郵便局で仕事かしたくて生きてきたんだっけ?単純にそう思った。まだ学生でいたいなどという気持ちが違和感を生んだのではないということだ。そうしたらさ、周りの友人は突然、伊勢丹で写真撮ると受かるらしいとかどここのスーツは印象がいいらしいとか言い出すんだもん。あるわけないじゃん、そんなの。(笑)でもいいと思う、日本のそういうスタイルなんだったら、それはそれでカッコいいと思う。でも私らしくない、かな。今でも夢が毎日変わる私にとって、

どんな仕事に就きたいかっていうことを現実的に考えてその分野を研究して就活するのは無理に近い話なのだ。そんな時、あれほど英語ができなかったあずちゃんfluentlyになって帰ってきた。英語は私の分野だった。負けず嫌いの私はとても、かなりくやしかった。違和感を覚えながらも就活して、きつと私を採用したい会社が絶対にあるのはsureなのでそこに就職して、辞めて留学でもしようかとたまに考えながらもせっかく入った会社だし、と諦めてそれなりに仕事を楽しんでいこうか、と考えた。でも不景気だし、別に人生の1年や2年海外で暮らしてもいいかと思って大学に休学届を出した。

Whitianga EVAでは午前中grammarとconversationのクラス、午後はIELTSクラスで勉強した。Upperクラスから始めて、最後は念願のadvancedクラスで勉強することができた。最初の1週間こそついて行くのに必死だったけど、負けず嫌いの性格からみ

んなとの差を埋めるのにそんなに時間はいらなかったし、日本に帰りたいと思うことは昨年1年間1度もなかった。初めて一人で生活するのやご飯を作るのも心配だったけど、一人になればなんでもできるようになるんだなあとと思った。20年以上電球を替えたことがなかった私は、部屋の電球が切れて替えているときに「やればできる」という言葉を心底実感した。(笑)友達が「ご飯食べにおいてよ」って言ってくれたり、夜中Hahei Beachまで遊びに行ったり、party行ったり田舎暮らしも悪くないと思った。

半年はEVAの生徒と仲良くしていたが、teenagerが多いことと日本人が多いことで私の英語によくないと考えて、隣のCoromandel outdoor language centreのOpenNight に足を運び友達を作った。もう一つの語学学校はヨーロッパからの生徒が多いし、nationalityに富んだover18の多い学校だ。EVAは授業がとてもいい。Well-organizedされていてちゃんとしたgrammarで英語を話すことが大事だと教えてくれる。先生の質が非常に高い。ここでは割愛するが、正直授業以外の難点はかなり多い。

昨年私は本当に恵まれていたと思う。本当に、thoroughly luckyだったと思う。両親にはとても感謝している。人との別れを悲しいとか寂しいと思えるようになった。友達と南島や北島のいろんなところに旅行もしたし、いろんな国の友達ができ。考え方も変わったし、日本をより好きになった気がする。離れてみて日本のいいところにたくさん気付いた。

今年1年は日本で大学に通って卒業するが、日本での就職は現時点で考えていない。帰国1週間前に取得したIELTSスコアを利用してまた海外で勉強するつもりだ。New Zealandで仲良くしてくれたみんな、本当にどうもありがとう。おかげでHalukaは幸せな1年を過ごせました。これから英語を勉強して英語で仲良くしましょう。EVAで教えてくれただいたいすきなVanessa,Halukaに英語で話す・勉強する楽しさを教えてくれてありがとう。私が昨年出会ったすべての人が幸せでありますように。

娘二人のニュージーランド留学と留学生を迎えて… 板津ママ

-

この2月末に長女(遥)は、大学4年生の学年を休学して1年間の語学留学、次女(梓)は3年間の高校留学から大学受験のため昨年9月末に無事帰国しました。先に留学していた梓の所へ何回か訪れていた遥は「英語は自分のほうができるはず…」とっていました。が、梓の英語でコミュニケーションする姿を見て刺激になり、自分から進んでNZへ飛び込みました。

子ども二人を海外へ留学させることは、親としてそれは、それは人さまには言えない資金繰りもありましたが二人は、その苦勞以上のものを親に残してくれました。そして、周りからは、年頃の子を海外へ出すことに不安はないのかよく聞かれましたが私たち家族にはミッチーという見方がいましたから不安は感じませんでした。ミッチーは常に前向きに相手のいいところを発見して、その相手の一番いい方法を見出してくれる案内人のプロフェッショナルです。私は、そう信じ確信していたので何の不安もなく梓に続いて遥もおくりだすことができました。

梓が高校2年生になった7月のスクールホリデイを利用して、私はNZのチームズ高校と1年時にお世話になったフティアンガにあるEVAへ梓の友達2人も一緒に訪問しました。フティアンガでは、女4人が生活するにはあまるほどの大きなお家を借りEVAのスタッフ、先生方、留学生とで毎晩のようにパーティ三昧でした。フレンドリーなEVAの方々は、梓がお世話になっているのにもかかわらず歓迎して集まってくれました。その気持ちのおおらかさ、広さには感動しました。また、EVAの真ん前に借りていたお家があったので留学生がランチをしに立ち寄り、自分の将来や勉強の進め方など教えてくれました。私は、その留学生の話聞きながら自分が学生だった頃「本当は自分が留学したかった」という記憶がムクムクと目を覚ましてるのを感じていました。

この10日間の旅は若い世代と同じ空間を過ごした喜びもありますがバック旅行では味わえないことを経験することができました。

「包丁や油が飛ぶのが怖い」と言っていた遥は、初めてNZで自活を経験しました。自宅から通い大学生活をエンジョイしていた遥が毎日の食事やお金の管理など全て自分でやっ

また、NZへ旅立つ前の、何かいつも不満を感じていた梓が自分自身をきちんと持ち、柔らかさを漂わせるまでに成長していました。英語はもとより、人として大切なことを体験で身につけて学んで知識にもしてきたのだろうとすぐに察することができました。うれしかったことがあります。梓がNZの高校で一緒だった韓国の留学生ともう既に大学生になっている日本の女の子が我が家へ遊びに来ました。韓国ドラマで覚えた韓国語の復習をし、プランを考え準備から楽しみました。夫も流暢な日本語(?)と得意なジェスチャーでコミュニケーションをとり歓迎していました。梓からは、「ママ、家はホストファミリーにはなれないね。破産するよ!」と言われましたが、心から歓迎したいという気持ちがありました。

1週間と短い間でしたが若い3人を見ていて男女の性別、日本と韓国の間境も無く友達、人として繋がっている姿に感動しました。歴史、文化、教育など全く違う若い世代がそれを越えた人間として大切なコミュニケーションを英語で図り繋がっていく彼らを誇りに思うと同時に将来が楽しみになりました。

彼には日本へ来てよかった、また、行ってみたい…、もっと日本を知りたい。とってくれたらいい…、彼らがこれからかも繋がっていくためのステップになればいいと思っています。

娘たちが作ってくれたこの機会を生かして私たち夫婦は日本へ来る留学生、海外へ出る留学生のために何か応援していきたいと退職後の楽しみ(目標)を持つことができました。自分ができなかった「留学」は次世代を担う人たちのために応援していく形に変えていこうと思います。

娘の留学は娘だけが成長したのではなく親である私たち夫婦にも視野を広げてくれました。ミッチーのように相手のいいところを発見し若い世代を応援していきたいと、今スイッチが入りました。

ミッチー、梓の留学中3年間日本からの後方支援と私たち親子へいつも貴重な機会を作ってくださり感謝しています。これからも、私たち親子はミッチーと繋がりの社会で貢献していきたいと思っています。ミッチー、ありがとうございました。